

masquerade part nine

number 6

限定100部の内の12/100

edited by dr masato mugitani

子どもたちに手品を見せる

麦谷真里

(はじめに)「子ども騙し」という言葉があります。これは大人に使う言葉で、「底意が見え透いていて子どもくらいしか騙せない」という意味ですが、手品の場合は、子どもはなかなか大人のようには騙されてくれません。子どもを対象にした場合の手品用具(写真159)があるくらいですから、演出もやり方も、大人に見せるときとは大いに異なると認識しなければなりません。



写真159

特に小さな子どもにとっては、日常生活の毎日が驚きの連続なので、トランプの色が変わったり、スポンジ・ボールが増えたりしたくらいでは、大した驚きではないのです。後で詳しく述べますが、マジシャンがこんな手品はつまらないと思っていても、見せ方ややり方によっては、子どもたちにとって大きな喜びになることがあります。そういう観点からは、子どもたちに手品を見せるというのは、まったくアプローチが異なるということを知ってもらうのと、たまたまそういう機会に遭遇したときに、どんな手品をどのように演じるのかを、取り上げてみました。今までなんとなく子どもたちに大人

と同じ手品を見せていた人にとっては、まさに目から鱗だと思います。

いまから40年ほど前、アメリカ合衆国に留学していたときに、子どもの誕生日に手品をやってくれと、けっこういろいろなパーティーに呼ばされました。それと、county(郡)だったか、子どもが大勢いる地域のコミュニティーのイベントで手品をやったこともあります。一度やると、何回も呼ばれます。私は、この種の手品は、すべて無報酬で行なっていましたので、主催者には都合がよかつたのかもしれません。それまで、子ども相手に手品をやったことはそんなに多くなかったので、演目を選ぶのに苦労しました。いくら子ども相手とはいえ、自分が好きでもない手品をやりたいとは思わないのが人情です。実は、アマチュアの私にとってはそれが大きな間違いで、プロなら、自分の好悪に関係なく、観客の喜ぶ手品をやるのがビジネスだと思います。当時、私が、子どもたち相手に好んでやっていたものに、袋玉子があります。これは、基本的な現象は普通の袋卵なのですが、二重になっている袋を最後にひっくり返すと、全体が象になる造りの袋で、玉子は「象の玉子」だったというオチです。これは、評判が良くて、子どもが主たる観客のときはいつも演じていました。結論から言うと、最も子どもたちに人気があったのは、手品ではなくて、風船の造形でした。いまでは、日本でも普通に演じている人が大勢います。しかし、40年前は、日本で見かけることはほとんどありませんでした。アメリカでは本が出ていましたが、風船の選び方などもよくわからず、当時、ボルティモアの奇術用具店で働いていた若き日の Scott Alexander に作り方を教えてもらいました。風船の造形は、単純な犬を作るもので、ときどき、ブードルやダックスフントにするくらいで基本的には同じ犬でした。それでも子どもたちには、もらって家に持つて帰れるので、大いに人気があり、私は手品をやったあとも、ずっと風船を作っていました。ペンシル・バルーン自分で膨らませて作るので、作るのはともかく膨らませるのがたいへんで重労働でした。大きなイベントだと子どもたちが長い列を作つて並ぶので、気が遠くなります。子ども相手のときは演目を選ばなくてはならないと痛感しました。

欧米には、子ども相手の、いわゆる "Kids Show" を専門にしたマジシャンが大勢います。われわれは子どもではないので観る機会は少ないのですが、アメリカ合衆国で David Kaye のレクチャーに出たことがあります(写真160)。

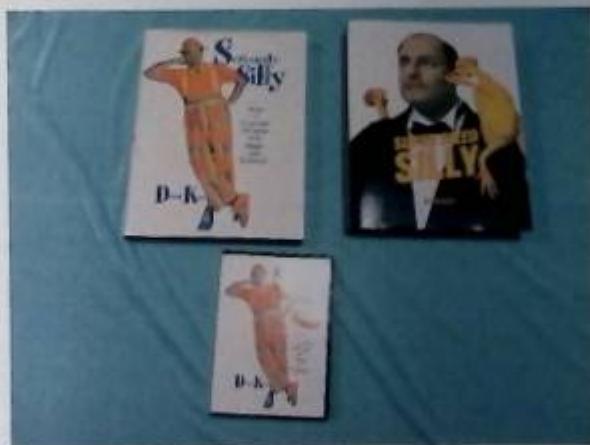


写真160

正直言うと、このときは、それほど感心しませんでした。レクチャーは、彼が実際に子どもたちの前で実演している映像を観て、それを元に解説し、かつ演じている手品のタネ明かし(?)をして、同時にその道具を販売するものだったのです。そのとき解説された手品が、あまり日本人向きの内容でなかったのが感心しなかった大きな原因です。ただ、"PEEK-A-BOO BUNNY"はそれまで観たことがなかったし、子どもたちの反応も、おそらく日本の子どもたちも同じような反応をするだろうと思ったので購入しました。

ところが、あとで彼のDVDや本(前掲:写真160)を観たり読んだりして驚きました。非常に系統的かつ理論的に書かれていますが、なるほど、と感心することが多いのです。たとえば、ある行為や仕草で子どもたちが笑ったり喜んだりしたら、同じ動作を繰り返したら再び何回でも受ける、というのは、まったくその通りなのですが、実際に演技していると、なかなか抵抗があります。それを David Kaye は、あっさりとやってみせます。子どもたちは、禁止されたことをしたがる、というのも言い得て妙です。ただし、タイミングが難しいです。彼の本には、このような原則が項立てて書かれていますから、それらを系統的に学ぶには読んだほうが早いです。私はむしろ、実際のアイテムを通じて、演技の中で特徴を解説したほうがわかりやすいと思うので、今回はそちらを採用しました。これは試験勉強で言えば、教科書を網羅的に読んで試験に備えるか、実際の問題を解きながら、全体像を把握するかの違いで、私は後者のアプローチを探ることにしました。

1. 作り間違えた国旗

アメリカでは、"mismade flag"という有名な手品で、青と赤と白のハンカチーフで星条旗を作ろうとしますが上手にできないで、ストライプの色や星の位置や色などが間違って作られる現象の手品です。バリエーションも多くて、いろんなタイプの商品が売られています。これは商品としてパッケージになっていて、しかも比較的安価(3000円くらい)なので便利なのですが、残念ながら、日本の子どもたち、特に小さい子どもたちが理解するのは無理です。反対に、日の丸は小さい子でもわかりますので、日本の国旗で行ないます。

[必要なもの](写真161)

- ①90cm角の白いシルク 1枚
- ②90cm角の赤いシルク 1枚
- ③大きめの「祝」もしくは「寿」のシルク(結婚式用の手品で商品化されています) 1枚
- ④大きめの日の丸 1枚
- ⑤チェンジング・バッグ 1個

ダイ・チューブを使ったほうが鮮やかですが、これくらいの大きさのシルクになるとダイ・チューブを使うのは無理です。それぞれ小さ目のシルク(30cm角など)が入手できるのなら、ダイ・チューブでもかまいません。ただし、ダイ・チューブ1本ではできませんので、2本必要ですし、ハンドリングが根本的に異なります。相手が子どもだからというわけではありませんが、技術に拘泥することなく、大きなシルクでチェンジング・バッグを使ったほうが現象はわかりやすいです。



写真161

[準備]

- ① チェンジング・バッグの一方の側に、まず、日の丸のシルクを入れ、その上に「寿」のシルクを入れておきます。
- ② チェンジング・バッグのもう一方の側には、白いシルクと赤いシルクとを入れておきます。こちらの側を先に使います。

[やり方]

- ① 「きょうは、みんなと一緒に日本の国旗を作つてみたいと思います」と言って始めますが、子どもたちの対象年齢によっては、「国旗」という言葉が理解されないので、反応を見ます。
「みなさん、日本の國の旗を知つていますか？」と訊くのもいいです。何人かの子どもが手を上げますから、彼らに言わせます。
「正式には日章旗と言つんですが、日の丸と呼ぶほうがわかりやすいですね」と言いながら、子どもの一人にどういうデザインの旗か表現させます。
- ② 「そうですね。白い生地の真ん中に赤い大きな丸のある旗です」と言いながらジェスチャーで大体のイメージを示します。
「それでは、これから、その日本の旗を作りますが、誰かお手伝いしてくれる人はいませんか？」
アメリカでこんなふうに言うと大勢の子どもの手が上がります。文化の違いです。日本では年齢や親がそばにいるとか、ケースによります。手を上げた子どもの中から一人を選びます。男の子でも女の子でもいいのですが、見た目ではわかりませんので、どういう子どもがいいかはなかなか難しいです。
- ③ 前に出て来た子どもに名前を訊きます。フルネームで聞いてから、いつもみんなに呼ばれている呼び方を訊きます。ここでは、仮に女の子で「さっちゃん」ということにします。まず、もし、子どもに被せる大きな布製の子ども用シルクハットを用意していたら、それを被せます。
「マジシャンは、みんなこんな帽子を被るのです」と言いますが、帽子は大きくて、さっちゃんの顔を完全に覆ってしまいます。マジシャンは、それにまったく気が付かないふりをしていますが、

さっちゃんに話しかけようとして、突然、気が付いて、帽子を上に引き上げて斜めに被せ、さっちゃんの顔が見えるようにします。こういう行為でも子どもたちには面白くて大いに喜びます。

④「さっちゃん！ 日の丸は何色と何色とでできていますか？」と訊きながら、チェンジング・バッグを取り出します。さっちゃんはおそらく赤と白と答えます。

「それでは、この中に赤いハンカチと白いハンカチとが入っていますから取り出してください」と言って、チェンジング・バッグの中からさっちゃんに赤いシルクと白いシルクとを取り出させます。そうしたら、2枚のシルクを一旦マジシャンが預かって、

「袋の中にはもう何もありませんか？」と言って、さっちゃんにチェンジング・バッグの中に手を入れて点検してもらいます。さっちゃんが点検したら、今度は、2枚のシルクを一旦さっちゃんに渡して、マジシャンが、チェンジング・バッグを裏表にひっくり返して中に何もないことを見せます（写真162）。見せたらチェンジング・バッグは元に戻します。



写真162

⑤「それでは、バッグの中で日の丸を作るために、赤と白のハンカチを入れましょう」と言って、バッグを差し出し、この中に、さっちゃんに赤と白のシルクを入れてもらいます。まだチェンジング・バッグはそのままです。子どもが観客のときは、先を急いでいけません。

⑥マジシャンは持っているチェンジング・バッグを振って、あたかも何かが起こったような表情をします。そして、バッグの中をおそるおそる覗き込んでから、さっちゃんに、中のハンカチを取り出すように言います。さっちゃんが取り出すとき、マジシャンはさっちゃんのほうを向いていないで、彼女が2枚のシルクを取り出したら、大成功したかのような顔で子どもたちを見渡します。さっちゃんは、シルクに何も変化がないので、そのまま立っています。こういうところが子どもたちは面白く感じるのです。

⑦マジシャンは、さっちゃんのほうを振りむいて、赤と白のシルクがそのままなのに驚きます。そして、再び、チェンジング・バッグを裏表ひっくり返して点検してみせます。

「あー、わかった。おまじないをかけるのを忘れていました」と言います。

さてここで、『おまじない』をかけるのですが、まず、さっちゃんも含めた子どもたちに、どんな魔法の『おまじない』を知っているか訊いてみます。『あぶらかだぶら』とか、『ちちんぶいぶい』とか

いろんな言葉が出てくると思います。もし、子どもたちの間で圧倒的に流行っている『おまじない』があつたら、それを採用するのも子どもたちは喜びます。そうでなければ、子どもたちが今まで聞いたこともない、かつリズム感が良く発音しやすい『おまじない』を予め考えておいて、それを使います。ここでは、仮にそれをダンテが使っていた『シン・サラ・ピン』にします。

- ⑧「いいですか？みんなでおまじないを唱えるのです」と言いながら、もう一度チェンジング・バッグの中に、赤と白のシルクをさっちゃんに入れてもらいます。そして、マジシャンが『シン・サラ・ピン』と唱えながら、チェンジング・バッグの把手を回転させて中の面を換えます。
- ⑨さっちゃんにバッグの中を覗かせて、上部にある「寿」のシルクの端を握ります。そのまま、チェンジング・バッグを引いて、さっちゃんの手に「寿」シルクだけが残るようにして、チェンジング・バッグの面を再び換えます。このときも、マジシャンは大成功したかのような表情をします。「寿」のシルクは大きく拡げない限りは、赤と白とが混ざって見えているので、さっちゃん本人にも観客の子どもたちにも、あたかも日の丸が出て来たような印象を与えます。
- ⑩「大成功です！！」と言って、さらに、「さっちゃん、完成した日の丸を拡げてみんなに見せてあげてください」と言います。さっちゃんが拡げると、それは日の丸でないことが子どもたちにもわかります。「寿」や「祝」の漢字はわからなくても、赤い丸の日の丸でないことはみんなにわかるので、口々に「ちがう！」とか言います。このように、子どもたちは、マジシャンが失敗すると喜ぶのです。これも「子どもショー」では、覚えておく大原則です。
- ⑪「寿」のシルクを覗て、再びマジシャンは驚きます。そして、慌てて、さっちゃんから「寿」のシルクを取り上げると、持っているチェンジング・バッグの赤と白のシルクの上に入れます。ここで再び考える仕草をします。
- ⑫「わかった！バッグはさっちゃんが持つて、みんなでおまじないを唱えないとダメなんだ！」と言って、チェンジング・バッグの面を換えて、さっちゃんに渡します。そして、「1、2、3」と数えながら、みんなで『シン・サラ・ピン』と唱えます。
- ⑬「今度はどうですか？」とさっちゃんに、自分でチェンジング・バッグの中から日の丸のシルクを取り出させます。チェンジング・バッグはさっちゃんから受け取って、テーブルの上にでも置きます。さっちゃんが日の丸を拡げると子どもたちからも歓声があがりますから、今度こそ成功です。「大成功でした！」と言って、子どもたちからさっちゃんに拍手をもらいます。マジシャンから、さっちゃんにありがとうございます。子どもはみんなの前で讃美られるのは誇らしいものです。

【コメント】

実際の演技にしたがって、台詞も含めて詳細に書きました。これでも足りないくらいです。実は、おまじないをかけるときに、風船のようなマジック・ウォンド(写真159の中央参照)を使うと、面白いのですが、それは省きました。子ども用の手品のひとつの例として、日本流の *mismade flag* を最初に解説しました。マジシャンにはそれぞれカラーがあります。子ども相手の手品などいつでもできると思っていた方も、上の解説を読んで、自分にはとても無理だと思われ方がいらっしゃる

と思います。手品の技術が優れているだけでは、子どものショーはできないのです。

David Kaye はその著 "Seriously Silly" で、子どものショーに必須な10の項目を掲げていますが、日本にはそぐわないものあるし、無理矢理10個作った感じなので、私が大事だと思うことを5つだけ選びました。

- ①子どもに話すときは大人に話すのと同じように話すこと。これはものすごく大事なことです。よく、子どもには子ども向けの言葉で話す人がいますが、これは間違っています。
- ②手品の不思議さよりも、子どもが楽しんで喜ぶことを優先すること。これは、マジシャンにとっては不本意かもしれません、観客が第一なのは、何も手品に限ったことではありません。
- ③子どもが、「あーそれ知っている」と叫んでも気にしないこと。大丈夫、あなたの手品のやり方は知りません。
- ④サーストンの3原則を無視して、これから起こる現象を先に子どもたちに説明します。たとえば、「これから、このハンカチを消して見せます」などです。そして、それが上手く行かなかつたときに、子どもたちは大いに喜ぶのです。
- ⑤子どもは参加することが好きですから、子どもを参加させる手品を選ぶようにします。

2. PIZZA OVEN

これは、ダイ・ボックスのピザ版で、オーブンの中でピザのある場所を当てる子ども用手品の定番です。いまでも手品市場で、1万円程度で売っている人気商品です(写真163)。



写真163

[ピザ・オーブンの構造]

通常の商品は、木製で造られていて、向かって(観客側から見て)左側と右側にオーブンのドアがあつて、それぞれ左右に開くようになっています(写真164)。これに、やはり木製の板で造られたピザが、通常2枚セットで付いて来ます(写真164)。ピザが2枚付いて来るのは、1枚を演技に使い、もう1枚をクライマックスで別の場所(たとえば、マジシャンの背中)から出すときのためです。両扉を開けた写真164をよく見ていただくとわかると思いますが、向かって左側のオーブンが二重底になっていて、一旦、右側に移動したピザが左側に戻るときは、この隠れた二重底の空間に

戻りますので、もう、左側の扉を開けてもピザは見えない構造になっています。一方、ふたつのオーブンの扉の間には空間があって、仮にピザがその部分を通過すれば、観客からは移動が見える仕組みになっています。



写真164

商品についてくるピザは、丸い板に絵を書いただけのもので、操作性はいいのですが、リアル感に欠けます。そこで私は、手品用ではありませんが、ほぼ同じ大きさで、本物のピザのように見える食品サンプル用の樹脂製のピザを使っています(写真165の左)。これは、板に比べると操作性は良くありませんが、大人が見ても本物のピザと遜色がありません。

ただし、これを使う場合は、いくつかの問題があります。その第一は、操作性です。ピザの手品で重要なのは「回転」です。ダイ・ボックスと違って、木製の板のピザは、これも木製のオーブンの中で、回転しながら移動する途中のところが観客から見えるわけですから、子どもたちにも、ピザが回転して移動したことがわかる仕組みになっていないといけません。ただし、よく考えると、この手品の場合は、「回転」して移動することが一種の仕掛けになっていて、「回転」のスムーズさやスピードは、重要ではありますが、それほど大きな要素ではありませんから、オーブンに使うのは食品サンプル用のピザでもかまわないので。



写真165

問題の第二は、食品サンプルのピザの「厚さ」です。市場で樹脂製の薄いものが見つかれば問題ないですが、厚いものだと、商品の手品用具のオープンの二重底の秘密空間に入らない場合があります。その場合は、ピザの厚さに合わせて空間部分だけ加工しなければなりませんので、ひと仕事増えます。

したがって、以下の解説では、商品に添付されてくる木製のピザを使っています。

[現象]マジシャンは、「今日は、みんなに美味しい焼きたてのピザを御馳走しましょう」と言ってこの手品を始めます。そして、実際に、手に持っているオープンに入れてピザを焼きますが、焼き上がったころにオープンを開けるとピザが消えてしまっています。このとき、観客の子どもたちからは、ピザが反対側のオープンに転がって行くところが見えます。子どもたちは「反対側！」と叫びながら大騒ぎをしますが、マジシャンには聞こえません。これを何回か繰り返した後、ピザは本当に消えてしまい、とんでもない場所から現れます。

[必要なもの]

①ピザ・オープン・マジックキット 1セット

市場では数種類販売されていますが大同小異です。Smoky Mountain 社のものだけは、約3万円とやや高めで、ちょっとメカニズムがちがいます。普通の商品は、オープンのドアを開けて中にピザがないことを見せるだけなのですが、Smoky Mountain 社の Magic Pizza Box は、オープンの後ろ側の壁に大きな丸い穴が開いていて、オープンを持っているマジシャンの手が見えるので、確かに何もないことが見えるのです。しかし、そんなことを気にするのは大人だけですから、必須ではありません。

この奇術用具を買おうと、ピザは2枚付いて来ます。オープンの中の移動で使う1枚と、クライマックスで出て来る1枚です。

②もし、観客の子どもを一人、前に招いてこの手品を行なう場合は、前に出て来た子どもにシェフの上着と帽子を用意します。そして、このシェフの上着の背中部分にクライマックスで登場させるピザを貼りつけておきます。

[準備]

①オープン・セットの左側(観客から見て左側)にピザを1枚入れておきます。これは最終的に消える分です。

②もう1枚のピザは、最後のクライマックスで出て来る分です。普通は、マジシャンの背中のどこかにくっつけておきます。しかし、これだけを演じる場合は、それでもかまいませんが、ほかにも何か演じる場合は、背中を見せることができませんので、このマジックを演じる直前にシェフの上着を着るようにします。そして、このシェフの上着の背中側にクライマックス用のピザを貼りつけておきます(写真166)。また、子どもの一人を前に呼んで、子どもとの掛け合いで演じる場合は、前述のように子ども用のシェフの上着と帽子を用意して、こちらのほうの上着の背にクライマックス用の

ピザを貼りつけておきます。



写真166

[やり方]

①シェフの上着を着ます。背中にはピザが1枚付いています。

ピザ・オーブンの右側(マジシャンから見て右側)にピザを1枚入れて両手を持って子どもたちに示します。扉は両方とも閉じたままです。以下、左右はすべてマジシャンから見た左右です。

「これが何かわかりますか?」と訊きますが、通常はわかりません。扉に英語で文字が書いてあるので大人ではわかる人がいるかもしれません。

②オーブンの両扉を開けて、中のピザを取り出します。ここで、子どもたちは、「ピザ!」と呼びますが、オーブンについては説明が必要です。

「そうなんです。これはピザです。ピザが好きな人はいますか?」同時にマジシャンは自分の手を挙げます。これを見て、ピザが好きでも好きでなくても子どもたちは手を挙げます。

③「これはおいしいピザなんですが、実はまだ焼いていません。これは、ピザを焼くオーブンなんです!」と手に持っているオーブンを示します。子どもたちにはオーブンの意味のわからない子もありますが、説明する必要はありません。

④「オーブンは2つあって、どちらかのオーブンでピザを焼きます」と言いながら、ピザを右側のオーブンに入れます。そのままオーブンの右側の扉を閉じます。

「こっちのオーブン(左側)は、いまは使いません」と左側の扉も閉じます。

⑤「さて、ピザはもう焼けたかな?」と言いながら、オーブンを左に傾けます。ピザが回転しながら右側から左側へ移動するのが子どもたちから見えます。

⑥右側の扉を開けます。ピザはありません。

「あれ?確かにさっきオーブンの中に入れたのに、ピザはどこへ行ったのかな?」と独り言を言います。子どもたちは、反対側とか、こっちとか、向こう側、とかいろいろ叫びますが、最初は聞こえないフリをします。しばらくしてから、子どもたちの声に耳を傾け、

「え?こっちのオーブン?こっちは使っていませんよ」と言いながらオーブンを再び右に傾けます。子どもたちからは、ピザが再び回転して右側に移動するのが見えます。

⑦左側の扉を開けます。空です。ピザはすでに回転して右側に行っていますから子どもたちは驚きません。

「ほらね？こっちは使っていないんですよ」とマジシャンが言うと、子どもたちは、口々に反対側だよ！などと叫びます。

⑧「うーん。さっき、ここに確かにピザを入れたのに」と言いながら、再びオープンを傾けて、ピザを左側に移動させてから、右側の扉を開けて空であることを見せます。

「空なんですよね」と驚いてみせます。

⑨ここで、子どもたちが、反対側の扉を指差しているのに気付いた風で、左側の扉を開けます。そして、そこにピザがあるのでマジシャンはびっくりします。慌てて、ピザを手に取って、焼け具合を確かめます。

「うーん。まだ焼けてないな」と言います。

「もう一度焼こう！」と言って、ピザを再び左側のオープンに戻します。

「今度こそ大丈夫だと思いますよ」と言いながら、オープンを子どもたちから見て左に傾けます。ピザが回転しながら右側へ移動するのが見えます。

⑩「さあ、もう焼けたころだ！」と言って、左側のオープンの扉を開けます。すると、またピザがないのでマジシャンはまたびっくりします。この時点では、言うまでもないことですが、ピザは右側の二重底の空間に入ってしまっています。

「あれ？またピザが消えた！」

子どもたちは、左側とか反対側とか叫びますので、今度も聞こえた風を装い、

「こっち側のオープン？」と右側の扉を指差します。子どもたちは、そうだそうだ、と言いますので、マジシャンは、おそるおそる右側の扉を開けながら、ゆっくりとオープン全体を傾けてピザを左側へ転がします。子どもたちはまた大騒ぎします。

⑪右側の扉を閉め、直ちに左側の扉を開けます。これは、子どもたちがずっとやって欲しいと思っていたことです。すると、そこにピザを発見してマジシャンは自分でびっくりします。

「あれ？いつのまに、こっちのオープンに来たのだろう？」

⑫「もうちょっと焼こう！」と言って、左側の扉を閉め、ピザを右側に回転させます。

「もう焼けたかな？」と言いながら、左側の扉を開け、ピザがないのでびっくりします。

「あれ？またまたピザが消えた！」

子どもたちは、また大騒ぎしますので、「こっち？」と訊いて、今度は、左側の扉を開けたまま右側の扉も開けます。もちろんピザはありません（見えません）。マジシャンは、

「あれ？どこにもないぞ？」と言いながら、子どもたちを見ますが、今度は、子どもたちにもピザのありかはわかりません。

⑬オープンの両方の扉を閉じて、オープンを両手に持ったまま、あちこちピザを探します。さがしている途中で、身体を回転させ、マジシャンの背中が子どもたちに見えるようにします。すると、この時点で子どもたちが再び騒ぎますから、耳を傾け、背中に付いているという言葉をキャッチして、シェフの上着を脱ぎ、背中のピザを回収します。

②金色のテープの部分に、小さ目の輪ゴム(#7程度)を2本ずつ離してかけておきます(写真168)。使うのは一方の端に掛ける計2本だけですが、輪ゴムが飛んでしまった場合に備えて、保険の2本を反対側の端にもやや離して奥にかけておきます。なお、さらに2本用意しましたが、これは、演技の途中で輪ゴムがなくなったことに気付いたときの予備ですので、ポケットに入れておくか、テーブルの上にでも置いておきます。



写真168

③シルクをチューブの中に押しこむのにマジック・ウォンドが必要です。必須ではなく、ペンやストローなどで代用できます。解説ではマジック・ウォンドを使っています。

[やり方]

①クリスタル・チューブは、3枚のシルクが繋がって出てくるという単純な手品です。しかし、子どもたち相手に演じるとなると、いくつか段階があります。順に述べます。

[第1段:3枚のシルクを見せる]

②「今日は道路にある信号機のことをみんなに訊きたいと思います。信号機には3つの色がありますが、何色と何色か知っていますか?」と始めます。
子どもたちはそれぞれに赤、黄色、緑と呼びます。

③「そうです。今日は、その信号機の色と同じ色のハンカチーフを持ってきました」そう言いながら、緑、黄色、赤のシルクをこの順に示します。

④「まず、緑はどんな意味ですか?」子どもたちが、「進め」という答えをしてくれるのを待ちます。「次に、黄色はどんな意味ですか?」子どもたちが、「注意」という答えをしてくれるのを待ちます。「最後に赤ですが、これはどういう意味ですか?」子どもたちが、「止まれ」と答えてくれるのを待ちます。以上は、子どもたちとのやりとりの便宜のためにあって、もちろん、道路交通法上は、緑は「進むことができる」、黄色は「止まれ」、赤は「停止位置を越えて進んではいけない」という意味ですが、このように子どもたちに教えているところは現実にはほとんどないので、演技のやりとりとしては、上の通りでいいと思います。

⑤「その通りです。みなさんよくわかっていますね。それでは、今日は、この3枚のハンカチーフをこの透明な筒に入れて、ひとつに繋いで見せましょう」と言います。すでに述べましたが、これから行なう手品の内容を予め観客に話すのは「サーストンの三原則」に抵触しますが、子どもたちが観客の場合は、このように演技の前に手品の現象を披露しておきます。

[第2段:3枚のシルクを順にチューブに入れる]

⑥まず、チューブの中に緑のシルクを入れます。入れたら、マジシャンの口をチューブの口に当て、空中に吹き上げて、緑のシルクを空中に吹き出します。

「こんなふうにして3つのハンカチーフをひとつに繋げます」と言いながら、上から落ちてくる緑のシルクを手で受け取ります。

⑦もう一度、緑のシルクをチューブに入れ、マジック・ウォンドで押しこんだら、次に黄色のシルクをチューブに入れ、これもマジック・ウォンドで押しこみます。最後に赤のシルクを取り上げて、チューブの中に入れ、マジック・ウォンドで押しこみますが、このとき、ちょっと強く押しこんで、チューブの反対側の端から緑のシルクを下へ落としてしまいます。しかし、マジシャンはそのことに気付かないような様子で手品を続けようとしますので、子どもたちは、「落ちた！」と叫びながら大騒ぎします。

⑧マジシャンは、初めて気が付いた様子で、床に落ちた緑のシルクを取り上げて、チューブの中にマジック・ウォンドで押しこみます。すると、今度は、黄色のシルクが床に落ちます。マジシャンは、これも気が付かないフリをして手品を続けようとします。子どもたちが騒ぎます。

⑨マジシャンは、またか？と気付いて床の黄色のシルクを拾い上げて、チューブの中にマジック・ウォンドで押しこみます。今度は、赤のシルクが落ちます。子どもたちは騒ぎます。このように、同じことを何度も繰り返すのと、マジシャンがシルクの落ちたことに気付かないことを子どもたちは喜ぶのです。

[第3段:3枚のシルクを空中に吹き上げる]

⑩シルクを3枚ともチューブに入れたら、

「それでは、3枚が繋がります！」と言いながら、マジシャンはチューブを口に当てて吹き上げます。すると、シルクはバラバラで空中から降りて来ます。マジシャンは驚いた様子で、

「どうしてうまく行かなかったのだろう？」と咳き、ただちに、

「あー、オマジナイを唱えるのを忘れていた！」と言います。

[第4段:3枚のシルクにオマジナイをかける]

⑪「オマジナイは、『シン・サラ・ピン』です。みんなで一緒に唱えます」と言って、3枚のシルクをチューブに入れます。入れたら、チューブの端を片手に持って、これを強く縦に上下に振りながら、「いいですか？シン・サラ・ピンと唱えるんですよ」と強調します。ところが、チューブを縦に強く振っているうちに、シルクが、チューブから次々と飛び出て、床に落ちてしまいます(写真169)。も

⑤「その通りです。みなさんよくわかっていますね。それでは、今日は、この3枚のハンカチーフをこの透明な筒に入れて、ひとつに繋いで見せましょう」と言います。すでに述べましたが、これから行なう手品の内容を予め観客に話すのは「サーストンの三原則」に抵触しますが、子どもたちが観客の場合は、このように演技の前に手品の現象を披露しておきます。

[第2段:3枚のシルクを順にチューブに入れる]

⑥まず、チューブの中に緑のシルクを入れます。入れたら、マジシャンの口をチューブの口に当てて、空中に吹き上げて、緑のシルクを空中に吹き出します。

「こんなふうにして3つのハンカチーフをひとつに繋げます」と言いながら、上から落ちてくる緑のシルクを手で受け取ります。

⑦もう一度、緑のシルクをチューブに入れ、マジック・ウォンドで押しこんだら、次に黄色のシルクをチューブに入れ、これもマジック・ウォンドで押しこみます。最後に赤のシルクを取り上げて、チューブの中に入れ、マジック・ウォンドで押しこみますが、このとき、ちょっと強く押しこんで、チューブの反対側の端から緑のシルクを下へ落としてしまいます。しかし、マジシャンはそのことに気付かないような様子で手品を続けようとしますので、子どもたちは、「落ちた！」と叫びながら大騒ぎします。

⑧マジシャンは、初めて気が付いた様子で、床に落ちた緑のシルクを取り上げて、チューブの中にマジック・ウォンドで押しこみます。すると、今度は、黄色のシルクが床に落ちます。マジシャンは、これも気が付かないフリをして手品を続けようとします。子どもたちが騒ぎます。

⑨マジシャンは、またか？と気付いて床の黄色のシルクを拾い上げて、チューブの中にマジック・ウォンドで押しこみます。今度は、赤のシルクが落ちます。子どもたちは騒ぎます。このように、同じことを何度も繰り返すのと、マジシャンがシルクの落ちたことに気付かないことを子どもたちは喜ぶのです。

[第3段:3枚のシルクを空中に吹き上げる]

⑩シルクを3枚ともチューブに入れたら、

「それでは、3枚が繋がります！」と言いながら、マジシャンはチューブを口に当てて吹き上げます。すると、シルクはバラバラで空中から降りて来ます。マジシャンは驚いた様子で、「どうしてうまく行かなかったのだろう？」と呟き、ただちに、「あー、オマジナイを唱えるのを忘れていた！」と言います。

[第4段:3枚のシルクにオマジナイをかける]

⑪「オマジナイは、『シン・サラ・ピン』です。みんなで一緒に唱えます」と言って、3枚のシルクをチューブに入れます。入れたら、チューブの端を片手に持って、これを強く縦に上下に振りながら、「いいですか？シン・サラ・ピンと唱えるんですよ」と強調します。ところが、チューブを縦に強く振っているうちに、シルクが、チューブから次々と飛び出て、床に落ちてしまいます(写真169)。も

ちろん、マジシャンは、シルクが外に出てしまつて床に落ちたことを知りません。そこで、空になつたチューブを吹き上げようと、自分の目の前に持ってきて、初めてチューブが空っぽになつていることに気付きます。

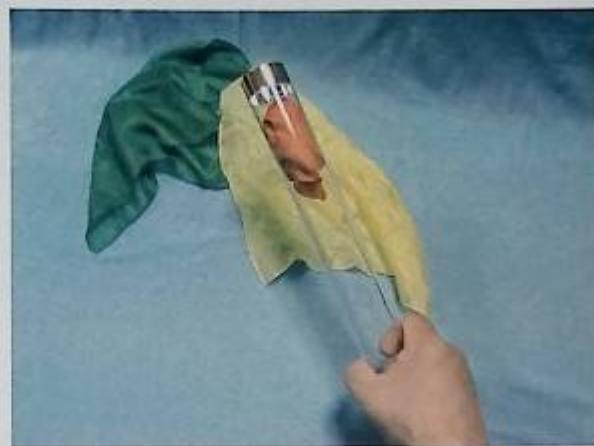


写真169

[第5段：繋がるシルク]

⑪マジシャンは驚いて、慌てて、床に散らばつたシルクを集めます。

「よし、今度こそうまくやるぞ」と呟いて、まず、緑のシルクを入れますが、最後の端は、チューブより少し手前にしておきます。次いで、黄色のシルクを入れるときに、その端を緑の端に重ね、親指で輪ゴムを外して2つの端をくっつけます（写真170）。



写真170

⑫さらに、黄のシルクの端に、赤のシルクの端を重ね、ここも輪ゴムで固定します。これで3枚のシルクが輪ゴムで固定されました。チューブを口に当てて、息で吹き上げると、3枚のシルクは、あたかも結ばれて繋がれたかのように、空中から降りて来ます。マジシャンは、これを手で受け取つて終わります（写真171）。

⑬この繋がつた3枚のシルクは、必ずマジシャンが受け取るようにしてください。そうでないと、子どもが取り上げて、輪ゴムで繋がれていることを発見して大騒ぎになります。



写真171

[コメント]

私は、株テンヨーのクリスタル・チューブを自分で演じたことはありませんでしたが、こんなふうにキッズ・ショーに使えるとは思ってもみませんでした。同様に、David Kaye は、ミルク・ピッチャー やコード・ゴー、カラーリング・ブックなども、いろいろ工夫して子どもたちに演じています。その他、David Kaye は演じていませんが、「ABCブロック」(写真159参照)なども子ども用に演じているマジシャンは多いです。つまり、見せ方次第では子ども用になるということで、そういうことを提示してくれただけでも David Kaye の本や DVD は一読一見の価値があります。

4. Peek-A-Boo Bunny

初めてこの手品を観たとき、きっと古くからある手品で、現代風にアレンジしたのかな?と思っていました。でも、道具そのものはカタログなどでも見たことはなかったので David Kaye から買いました。シルクハットの形をした板と、やはり板状のウサギを使った手品です(写真172)。いくつかのディーラーでこの奇術用具を探してみましたが、扱っていないようですので、David Kaye 自身から購入するか自分で作るしかないようです。247ドル(約3万2000円)です。



写真172

[道具の構成とメカニズム]

①板のシルクハットは二重構造になっていて、マジシャン側にウサギに入る薄いポケットがあり、その前に扉が2つついています(写真173)。



写真173

マジシャンから見て手前側の扉を開けると、中のウサギが見えて、客側の扉だけ開けると、ウサギが消えてシルクハットは空であるように見えます。

②シルクハットの裏側には、ウサギの耳の部分だけが上下左右に4つ付いています(写真174)。これらは、いずれもスライドすると、シルクハットから外へ出るようになっています。また、上下の耳と左右の耳はそれぞれ輪ゴムで固定されていて、外側にスライドしても戻るような仕組みになっています。



写真174

③板でできたウサギは2枚付いて来ます(写真175)。一枚は、演技に使うもので、もう一枚は、ウサギがシルクハットから消えたあと、まったく別の場所から出て来るクライマックス用のものです。通常は、マジシャンの背中にくっつけてあって、ウサギが消えたあと、マジシャンがウサギを探し回り、不用意に子どもたちに背中を見せたときに、子どもたち自身が背中に貼りついているウサギを発見するという演出です。

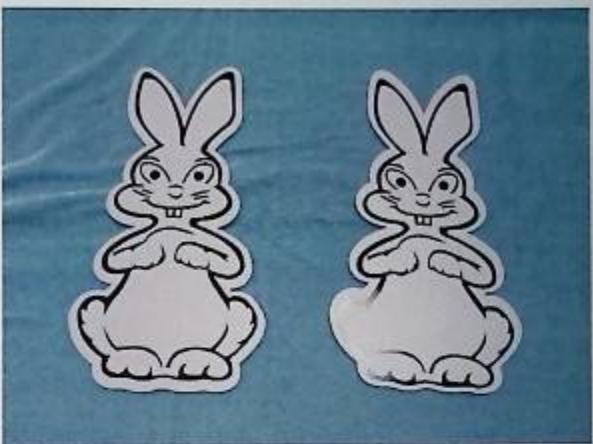


写真175

クライマックス用のウサギをいつ背中にくっつけるか、と、どのようにくっつけておくか、ですが、まず、くっつける方法として、マジック・テープを予めウサギの裏と上着の背中とに装着しておくやり方、あるいは、両方に磁石を付けておくやり方、安全ピンなど、いろいろありますが、もっとも簡易なのは、ズボンの背中側に挟んでおく方法です。これでも、効果が減じることはありません。

いつ、ウサギを背中にくっつけるかですが、演技の最初に2枚のウサギを重ねて示し、一度、マジシャンの背中を通過させながら、「ウサギは、いろんなところに見え隠れするのですよ」と言って、マジック・テープや磁石のセットしてあるほうのウサギだけを背中にくっつけてしまう方法は、見ている子どもたちの目の前でセットするので、直前まで準備が要りません。また、かなり前に会場で準備できる場合は、たとえば、学校で演じる場合、子どもたちの目がすぐには届かないような場所(本棚の上のほうの棚)などに、置いておくのもいい方法です。

[準備]

この手品は、子どもたちが必ず興奮するので、できるだけショーの始めのほうに演じるのが雰囲気を盛り上げるために適しています。その場合は、最初から、クライマックス用のウサギを背中にくっつけておきます。そして、左手にシルクハット、右手にウサギを持って始めます。

[やり方]

- ①左手にシルクハット、右手にウサギを持った状態で、子どもたちに向かい、「マジックで一番有名なものはどんなマジックか知っていますか?」と訊ねます。
マジシャンの姿を見ていますから、誰かが「帽子からウサギ!」と叫びます。
最近では、帽子からウサギを取り出すマジシャンなど見かけませんが、一種のイメージなので、もし、子どもたちの誰も言わなかつたら、マジシャンが説明します。
- ②「そうです。この大きな帽子からウサギが出て来ます。今日は、その秘密をみなさん教えましょう」と言います。

③「このウサギは、とてもよく訓練されているのです。マジシャンが、オマジナイを唱えて合図するまで、じっと帽子の中で待っているのです」
こう言って、シルクハットの上から手前のスリットにウサギを入れます(写真176)。



写真176

④ウサギを入れたら、シルクハットを左右から両手で持ちます(写真177)。



写真177

⑤「ウサギはオマジナイの合図が聞こえるまで、この帽子の中でじっとしています。そして、オマジナイが聞こえたら、帽子の中から飛び出して来るのです」と説明しながら、右手の親指を使って背後の上部のウサギの耳を上へ動かします(写真178)。すると、子どもたちからは、あたかも、いま、ウサギ(耳)がシルクハットから飛び出して来るよう見えますから、口々に何か言います。マジシャンは、子どもたちの声は聞こえないフリをして、ただちに、耳を元通りにシルクハットの中に戻してから、「このウサギは、とてもいい子で、とてもよく訓練されていますから、オマジナイを聞くまでは、帽子の中で、おとなしく待っているのです。決して、自分から出て来ることはありません」と言います。そう言いながら、再び、右親指を使って、ウサギの耳をシルクハットの上部から出します。このように、マジシャンの言っていることがウサギによってその通りに行なわれないことを子どもた

ちは大喜びするのです。



写真178

⑥何回か行なうと、マジシャンも耳が出ているのに気付きます。

「これは、ちょっとウサギとよく話さねばなりません」と言いつつ、耳を元に戻したあと、右手の親指をスリットに入れて、他の指で、扉を2枚ともしっかりと挟んで開けます。スリットの中にウサギが見えます(写真179)。



写真179

⑦ウサギに向かって話します。

「いいですか？私がオマジナイを唱える前に出てきてはいけません！オマジナイが聞こえたら帽子の外に出て来るので。いいですね？わかりましたね？」こう言って、2枚の扉を掴んだまま閉じて戻します。ここで、ウサギがちゃんとシルクハットの中にいることを子どもたちに印象づけておくのは大切です。

⑧「これで、もうウサギは、勝手に外には出て来ないとおもいますよ」と言います。そして、言うそばから、右手の親指を使って、背後の上部の耳をシルクハットの上から出します。子どもたちは騒ぎますから、マジシャンが気付いたらただちに引っ込ませるようにします。輪ゴムが付いていますので、指を離せば引っ込みます。

⑨マジシャンは驚いて、左手でシルクハットの上を掴んで塞ぎます。右手はシルクハットの右側を持ったままです。

「もうこれで、ウサギが帽子の外に出て来ることはできません！」と説明しながら、右手の親指で、背後の下部の耳を下へスライドさせます(写真180)。子どもたちは、それを見つけて大騒ぎしますが、マジシャンがシルクハットを見るときは、耳を元に戻してしまうので、マジシャンはいつも気が付きません。



写真180

⑩しかし、そのうち、シルクハットの下からウサギの耳が出てきているのに気が付いて、やや怒って、右手をシルクハットの下から掴んで下部も閉じます(写真181)。



写真181

⑪「さあ、これで、ウサギは勝手に帽子の外に出て来ることはありません！」と言いながら、下部を押さえている右手の親指で、右側の耳を外へ出します(写真182)。子どもたちは、再び、横から出しているのを発見してマジシャンに教えようとします。子どもの手品の原則である「繰り返し」と「マジシャンの失敗」がここでも有効なのです。最初は、マジシャンも、まさか横から出て来るとは思わない様子で子どもたちの言っていることに耳を傾けませんが、そのうち、実際にシルクハットの右側(マジシャンから見て右側)から耳が出ているのを発見し、あわてて、シルクハット

⑨マジシャンは驚いて、左手でシルクハットの上を掴んで塞ぎます。右手はシルクハットの右側を持ったままで。

「もうこれで、ウサギが帽子の外に出て来ることはできません！」と説明しながら、右手の親指で、背後の下部の耳を下へスライドさせます(写真180)。子どもたちは、それを見つけて大騒ぎしますが、マジシャンがパシルクハットを見るときは、耳を元に戻してしまうので、マジシャンはいつも気が付きません。



写真180

⑩しかし、そのうち、シルクハットの下からウサギの耳が出てきているのに気が付いて、やや怒って、右手をシルクハットの下から掴んで下部も閉じます(写真181)。



写真181

⑪「さあ、これで、ウサギは勝手に帽子の外に出て来ることはありません！」と言いかながら、下部を押さえている右手の親指で、右側の耳を外へ出します(写真182)。子どもたちは、再び、横から出しているのを発見してマジシャンに教えようとします。子どもの手品の原則である「繰り返し」と「マジシャンの失敗」がここでも有効なのです。最初は、マジシャンも、まさか横から出て来るとは思わない様子で子どもたちの言っていることに耳を傾けませんが、そのうち、実際にシルクハットの右側(マジシャンから見て右側)から耳が出ているのを発見し、あわてて、シルクハット

「これは、もう一度、帽子の中のウサギと話し合う必要があります！」

こう言って、指をシルクハットの外側の扉の下に入れて、外側の扉だけを開けてみせます。ウサギが消えています(写真185)。



写真184



写真185

⑯「あれ？ウサギがない！いったいどこへ行ったのだろう？」と言いながら、まず扉を閉めます。

次いで、シルクハットを持ったまま、あちこち探し回ります。このとき、シルクハットをマジシャンの身体にくっつけておくことは重要です。なぜなら、シルクハットの裏側には4つの耳がセットされていて、いわば楽屋裏が見えている状態だからです。ウサギを探し回る途中で、一度、背中を子どもたちに向けると、そこにウサギを発見して子どもたちは叫びます。最初は聞いてない風で探し回るのを継続しますが、そのうち気が付いて、背中のウサギを発見して、ウサギを掴んで前へ持って来ます。

「ああ、こんなところにいたのか！」と言って、子どもたちもマジシャンもホッとしたところでこの手品を終わります。

なお、クライマックスのウサギを本棚などの別の場所にセットしておいた場合は、マジシャンが子どもたちの視線を誘導して、子どもたちにウサギを発見させます。

いくつかの補遺

麦谷眞里

masquerade 本誌を発行送付してから、追加情報や新しいことを発見することがときどきあります。そこで今回は、少しだけ補足することにしました。

1. Volcanic Match

Part6-No.4で、6本目の指を使う「悪魔の指」という手品を紹介しました。これは、リコポディウムという物質の使い方の例として述べたものですが、何と、手品商品として市場に出していました。しかも、販売しているのは、スペインの Juan Mayoral のです。リコポディウムを入れる容器にマッチを装着できるような構造になっていて、それとリコポディウムがセットになって販売されています(写真186)。

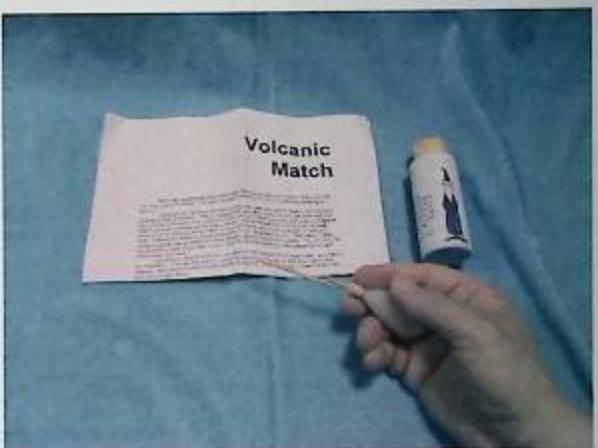


写真186

左手に持ったトーチに右手のマッチで火を点けるような場合に、両手が離れたままで、マッチの炎を突然大きくしてトーチに火を点けることができます。火山のように大きくなるマッチということだと思います。日本での価格はわかりませんが、アメリカのディーラーでは60ドル(約8000円)で売っています。

2. 「マックス・マリニ物語」(2002年 壮神社)

著者は、Misty ミュウという人です。Max Malini に関する本を参考しているのは間違いないですし、大筋の流れも、大きく外れてはいませんが、どちらかというと創作です。柳田昌弘原作となっていますので、いくつかのエピソードや事実を埋め込んだ柳田さんの創作だと理解すると正解です。もっと本格的に書けば良かったのに、と私はちょっと残念に思いました。

これは、masquerade part9 の No.6 です。

連絡のメールアドレスは、masqpart4@aol.com です。

2022年7月